

示説 7

アイスクリーム風味の好みの傾向ならびに親子の好みに影響する要因の一考察

キーワード：アイスクリーム、風味、嗜好、親子、好みの形成

○荒井威吉、玉木民子、海津夕希子
新潟青陵大学短期大学部

I. 目的

アイスクリームの風味の好みなどに関する全国的な意識調査が、15年間毎年1回行われている。今回は本学の女子学生と公開講座に参加した主婦（親）と子ども（小学生と幼稚園児）のアイスクリームの食習慣と風味に対する好みの傾向、牛乳とヨーグルトの消費動向を調査し、全国の意識調査の結果と比較した。また、親子のアイスクリーム風味の好み形成に影響する要因について、これまでの報告で示された事項と比較して考察した。

II. 材料および方法

1)アイスクリームの 風味の種類

- a. バニラ b. ストロベリー c. コーヒー
d. 抹茶 e. チョコレート

2)風味の好みの評価についての調査方法

公開講座「夏休み親子で挑戦 こだわり手作りアイスクリーム」に参加した子ども（小学生と幼稚園児）8名と主婦（保護者：30～60歳代）12名、秋に調査した本学女子学生（19～20歳）34名をパネルとした。5点評価法で、①口当たり、②風味が好ましい程度、③甘味や乳脂肪の濃さ、④総合評価を判定した。

3)自由回答による食習慣などのアンケート

調査目的と方法、および回答は自由意志で良く、回答しなくても良いことを説明して了承を得た。回答は、個人の情報が特定されないように無記名のものを集めた。調査は、アイスクリームの風味の好みの評価、アイスクリームを1ヶ月に食べる回数、食べる機会、食べたくなる理由、好きな風味の種類、購入場所であった。その他に1週間に牛乳、ヨーグルトを摂取する回数について調べた。

4)統計処理

5種類の風味と消費者パネルとしての参加者を要因とする二元配置の分散分析法を用いた。有意差の検定には危険率5%を用いた。

III. 結果

1)アイスクリームに関する食習慣

アンケート結果から、アイスクリームを1ヶ月に食べる回数は、学生、主婦、子どもの順に0～5回は44.1%、66.7%、12.5%、10回以上は52.9%、25.0%、62.5%であった。購入場所はスーパーマ

ーケットとコンビニエンスストアが多く、食べたくなる機会は甘いものが欲しい時と冷たいものが欲しい時が多かった。

2)牛乳乳製品に関連する食習慣

子どもと30歳代の主婦は1週間に牛乳を飲む回数が5回以上で多く、ヨーグルトは3回以下で少なかった。40歳代以上の主婦では牛乳は約3回で、ヨーグルトの方が若干多かった。学生は牛乳もヨーグルトも2回程度で一番少なかった。

3)アイスクリームの風味の好みの傾向

4項目の評価では、学生と主婦はパネル間に有意差があった。学生は試料間にも有意差があり、子どもは総合評価のみがパネル間に有意差が認められた。アイスクリームの評価では風味が重要であり、甘味・乳脂肪の濃さなども影響する。総合評価に与える要素は、学生は風味、甘さ・乳脂肪の濃さの順であったが、子どもと主婦に比べて口当たりの感覚が敏感で、間接的な影響が推測された。風味の好ましさの順序は、学生はバニラが50%以上で高く、ストロベリー、コーヒー、抹茶、チョコレートの順で、主婦はバニラが83%で最も多く、ストロベリーと抹茶、チョコレートとコーヒーの順、子どもはバニラとストロベリーが63%で高く、抹茶、チョコレート、コーヒーの順であった。

IV. 考察

これまでに、バニラ風味の感じ方は乳脂肪よりホエータンパク質やシロップなどの方が強い、子どもの食行動はブランドの影響を受ける、母親は子どもが嫌いな風味を良く知っているなどが報告されている。本調査でも、アイスクリームの風味は個人の好みの影響が強く、甘味・乳脂肪などの濃さや口当たりには製品の特性が間接的に影響している。子どもが好むアイスクリームの風味の順序には、親の好みと子どもが嫌いなものは買わないなどの購買行動が反映していると考えられた。

V. 結論

アイスクリームを食べる回数は子どもが多く、次いで学生、主婦の順であった。風味の好みはバニラ、ストロベリーが好まれ、抹茶・コーヒー・チョコレートは個人差が大きかった。子どもの風味の好みは、親の好みも影響することも考えられた。